

中国・西双版纳タイ族自治州への 漢族移住とその社会的影響

菅野 博 貢

はじめに

- I 西双版纳の地域の概要と人口動態
- II 国営農場建設における漢族移住と少数民族
- III 改革開放政策以降の漢族移住
- IV おわりに——少数民族居住地域への漢族移住とその先住民族への影響

はじめに

1. 研究の目的

中国が1970年代の終りから推進する改革開放政策は、90年代に入っていよいよ加速の度を速め、沿海地方の大都市の経済活動を中心として中国全土に大きな社会的変化をもたらしている。その変化の背景には、沿海部と内陸部の間で拡大する賃金格差や、農村における大量の余剰労働人口の存在があり、それまで厳しく抑制されていた農村から都市への移動がある程度自由化されたことをきっかけとして、多数の農民が都市へ流入する事態を生み出している。

このような状況下において、本論が対象とする中国雲南省西双版纳タイ族自治州（以下西双版纳と略す）の州都である景洪（1994年に市に昇格）でも、辺境開発の拠点としての都市開発が活発に行なわれている。だが、元来少数民族の居住地域であった西双版纳では、急激に流入する漢族によって先住少数民族の伝統的生活形態が激しい変化にさらされることになった。

このような西双版纳への漢族の流入は改革開放政策施行後にはじまったものではなく、新中国成立直後からその形を変えつつ今日まで続いているものであるが、先住の少数民族は、時代とともに激変する中央政府の方針に多大な影響を受け続けている。本論では、漢族の流入がおおよそ次の3期に分けられることを示し、その時代ごとに漢族が流入した経緯と先住少数民族への影響を考察する。

- 第1期 新中国成立後1950年代～60年代の国営農場建設にともなう漢族流入
- 第2期 文化大革命期の下放にともなう漢族流入
- 第3期 1980年代から今日にいたる改革開放政策下での漢族流入

本論では第I節で西双版纳全体の人口動態について俯瞰した後、第II節では景洪盆地における第1期の漢族流入について、第III節では景洪市街地における第2期と第3期の漢族流入について、その経緯と先住少数民族に対する影響を分析し、漢族流入が少数民族に与えた社会的・経済的影響について明らかにすることを目的とする。また、このような漢族の流入にもかかわらず、民族間の紛争を起こすことなく良好な関係を保っている漢族と先住少数民族の関係についても、その時代ごとに考察を試みる。

なお、このような漢族の移住が西双版纳に居

住する多くの先住少数民族に影響を与えたことは確実であろう。しかし漢族の移住地は第1期から第2期は平地に住むタイ族（正式な漢族側からの呼称は水傣族、タイ族側からの呼称はタイ・ルー族）と山岳民族の居住地域のはざまであり、第2期から第3期は主に平地に建設された都市部であったので、漢族の直接的な影響は、タイ族に対しては他の少数民族とは比較にならないほど大きい。したがって、本論では主にタイ族について検討し、他の山岳少数民族に対する漢族移住の影響については今後の課題としたい。

2. 先行研究と本論の位置づけ

少数民族が何らかの外的な影響によってその生活形態や社会構造を変化させることを具体的に明らかにした研究は、管見の限りでは非常に限られている。このような中で、少数民族が何らかの外的影響を受けた際に、生活の基盤である土地利用形態を民族固有の規範によって変化させることを明らかにしたピーター・クンスタッターの研究は、本研究と共通の視点を有するものといってよい。彼は北部タイのいくつかの少数民族を対象として、各少数民族が集落の人口増加や外的変化によって、それぞれの民族固有の生活規範、社会構造、生産様式が生活環境をどのように改変していくかを論じている^(注1)。

大林太良のグループによる研究は、本研究と同じく雲南の少数民族を対象として、流通経済の影響による少数民族ごとの対応の違いを明らかにしようとしている。短期間の現地調査をもとにする報告は、現地の案内者からの聞き取りによる情報がほとんどであり、少数民族の生の姿を伝えているとは言い難いが、その意図したところは中国少数民族研究の中では先駆的な研究事例といえるだろう^(注2)。

その他、中国以外の地域で複数の民族の混住について研究した事例としては、主に大都市内での多民族混住をテーマとしたものが散見されるが、その数はかなり限定される^(注3)。また、多民族混住を中心テーマとはしていないが、都市への流入人口とその居住についての研究事例としては、新津晃一氏をはじめとするスラムの研究などがあげられる^(注4)。

本論では、調査の各段階でこれらの研究のアプローチを参考にしつつ、中国独自の多民族地域における地域開発と漢族移住の経緯を整理し、それらが少数民族に与えた社会的影響について考察を加える。

3. 調査について

これまで筆者は、雲南省西双版纳タイ族自治州の州都である景洪の都市化と、その周辺集落の居住環境の変化を、住居形態などの物質的变化を中心に1987年3月から94年5月まで追跡調査してきた。特にこの調査期間の後半は、改革開放政策による高度経済成長の影響がこの地域にまで波及したために、景洪の都市化が加速度的に進行した。そして、市街地の拡大と共に流入する漢族も目に見えて増加し、景洪周辺の先住少数民族タイ族の集落環境は激しい変化にさらされている。当然ながら、物質的变化を追ううえで、それらを促している先住民族の社会的、経済的变化にも着目する必要が生じたため、その目的にそった調査を1993年9月から94年5月の間に実施し、それ以前の調査結果をあわせて本論の基礎資料としている。

本研究では、漢族の流入がはじまった1950年代の国营農場の建設期から、文化大革命期を経て、今日の改革開放政策のもとでの高度経済成長期に至る期間の漢族移住の経緯を明らかにし

ようとするものであるが、中国にあっては公表される文献資料がきわめて限られるために、対象地域内にある移住者たちの居住地に赴き、直接聞き取り調査を行なうことを調査の中心としている。ただし本論で第1期の漢族移住とした国営農場建設期の漢族とそれ以降に移住した漢族とでは、居住地も生活形態も大きく異なっているために、必然的に2種類の調査を実施することになった。

国営農場に居住する漢族の調査では、最初はその分布を明らかにしている。国営農場は景洪盆地周辺の山裾に分布しているが、調査協力者からの情報をもとにおおよその位置の見当をつけて赴いた国営農場で調査を行なった後に、その近くにある他の国営農場の所在を聞いて次の国営農場を目指す、という調査を繰り返している。国営農場は○分場○隊（たとえば3分場6隊など）の名称をもち、○分場は一つながりの地域に位置し、○隊は順序を乱すことなく分布している（たとえば3分場6隊の隣には必ず3分場5隊があり、場合によっては3分場7隊があるので、このような事情を理解していれば調査で見落とすことはほとんどない。

調査では、国営農場農民の民族や出身地別構成、移住してきた時期など農民自身に関すること、国営農場の立地や規模、形態、建設された時期など農場自体に関すること、さらに、現在の生産物や移住当時の状況などについて直接聞き取りを行なった。

西双版纳における国営農場の総数は正確には把握できなかったが、景洪盆地周辺に対象地域を限定して行なった調査では27カ所の国営農場について聞き取り調査を行なうことができ、そのサンプル数は対象地域内の国営農場総数の過

半数を優に越えているものと考えられる。

文化大革命期に移住してきた人々については、彼らの移住の状況を一般化できるほどにはサンプル数が集まらなかったため、本論では彼らからの証言の紹介にとどめざるを得なかった。

改革開放政策以降の移住者の人口、世帯数などは、政府経済計画局、同建設局の職員へのヒアリングからも公には全く把握されていないことが分かった。しかし、彼らの多くがタイ族の伝統的住居である高床式住居の床下に居住しているため、比較的容易にその居住場所を特定することができる。彼らについても最初に集落内における居住場所の分布を調査し、その後で面接調査を試みている。

本調査における集落地図の作成作業から、景洪市街地に接する調査対象集落（曼景蘭^{マンチンラン}）の高床式住居180棟のうち、3分の2以上の129棟の住宅で賃貸業が行なわれ、それらの住宅において移住者世帯の居住が認められた。さらに、中・小規模の長屋形式の集合住宅が47棟あり、ここに居住する者たちはほとんど全て外部から移住してきた人々であった。これらの集合住宅は、土地も建物もタイ族の所有である場合と、土地のみタイ族の所有で建物は移住者自身が建設したものの場合があった。そして、集落内の移住者の総数は、1993年10月に行なった住宅の悉皆調査の結果などから2000人から4000人の間であろうと推計される^(注5)。

このような居住地に直接赴いて行なった面接調査の内容は、移住者の年齢、職業、出身地などの一般的属性、また移住の目的、移住前の職業、移住の行なわれ方（親戚をたよるなど）、地縁組織の有無、定住意識などである。そしてこれらの調査のサンプル数は、38カ所（高床式住

居の床下賃貸アパート、長屋形式の集合住宅を含む)、130人である。

以上の聞き取り調査に加えて、最近出版された『西双版纳国土経済考察報告』(注6)や『歴史時期西南経済開発と生態変化』(注7)には、これまで外部には公表されていなかった集落ごとの人口統計や、国营農場が栽培、生産しているゴムの栽培面積などが掲載されている。本調査においてはこれらのデータを実際に現地を確認し、漢族による地域開発の実体を把握することにとめた。また本編では移住者を主体に扱うのでその報告は別稿に譲るが、1994年3～5月に行なった景洪市街地とその周辺集落のタイ族住民約520人に対する面接調査の結果も部分的に用いた。さらに、もと雲南民族学院の講師で現在景洪県の県知事秘書をされている岩宰氏他、西双版纳タイ族自治州人民政府の経済計画局、建設局、民族委員会等の職員として働いている雲南民族学院と北京民族学院の卒業生らの協力を得て、不足する資料・情報を補完した。

(注1) East-West Center, Population Institute, *Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand*, eds. P. Kunstadter, E. C. Chapman, and S. Sabhasri (Honolulu, University Press of Hawaii, 1978) / P. Kunstadter, "The Impact of Economic Development in Southeast Asian Tropical Forests," in *Tropical Ecology and Development: Proceedings of the Vth International Symposium of Tropical Biology, 16-21 April 1979, Kuala Lumpur, Malaysia*, ed. J. I. Furtado (Kuala Lumpur: International Society of Tropical Ecology, 1980), pp. 65-72.

(注2) 大林太良他「近代化と少数民族社会の対応——雲南省少数民族社会の近代化と伝統的文化——」(『東京経済大学会誌』第164号 1990年1月) 69～113ページ。

(注3) 宇高雄志他「マレーシア・ジョホールバル都市圏の住宅団地の民族混住と居住環境の評価特性」(『都

市計画論文集』第28号 1993年11月) 451～456ページ / 高井宏之他「シンガポールにおける高層住宅居住の実態」(『建築学会論文報告集』第431号 1992年1月) 79～85ページなどがあるが、研究例は限られている。

(注4) 新津晃一編『現代アジアのスラム——発展途上国都市の研究——』明石書店 1989年ではマニラ、バンコク、ジャカルタ、アンカラにおけるスラム住民を取り上げているが、これらの開発途上地域の都市におけるスラムの研究は、都市への流入人口を対象としているという点で、本研究と共通の視点をもつ。なお都市のスラムに関する研究は、すでに人類学や社会学の分野である程度の研究の蓄積があるが、紙面の制約上ここでは列挙しない。

(注5) 曼景蘭で1993年10月に行なった高床式住宅180棟の悉皆調査では、1棟当りの床下部屋の平均は3.89部屋であった。したがって床下部屋の総数は700.2部屋であり、1部屋は1世帯であるため700.2世帯となる。一方集合住宅の世帯数は500前後が数えられたが、これを加えると約1200世帯の移住者世帯が集落内に存在することになる。雲南省の1世帯当りの平均家族数は1990年で4.51人(雲南省人口普查辦公室編『雲南省第4次人口普查手工彙総資料』昆明 雲南人民出版社 1990年)であるが、移住者世帯には1人世帯も多く、この数字をかなり下回るものと思われる。仮に1世帯当りの家族人数を2人とすると集落内の移住者総数は2400人、家族人数を3人とすると3600人という数字が推計される。

(注6) 張立吳根編『西双版纳国土経済考察報告』昆明 雲南人民出版社 1990年。

(注7) 藍勇『歴史時期西南経済開発と生態変遷(西南研究書系)』昆明 雲南教育出版社 1992年。

I 西双版纳の地域の概要と人口動態

1. 対象地域の概要

本論では、対象地域を中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪市(1994年に市に昇格)と景洪盆地周辺の山裾にある植民集落をフィールド調査の対象とした。また近年の改革開放政策以降に大量に流入している漢族については、彼らが多数居住する景洪市市街地に隣接する集落、曼

景蘭（集落人口804人—1982年統計）を対象として調査を行なった。

雲南省は中国大陸の南西端にあり、面積は38万平方キロメートル、日本の全面積にほぼ等しい。西双版纳タイ族自治州はこの雲南省の南端に位置し、ラオス、ミャンマーと境を接している他、ベトナムやタイとも地理的に非常に近い関係にある。面積は1万9223平方キロメートルで、ほぼ四国の面積に等しく、その約95%は山地である。景洪県は自治州の中央の約3分の1の面積を占めており、メコン河の貫流する景洪盆地を中心に開発が進んでいる。

西双版纳タイ族自治州の民族構成は、1990年の統計では総人口79.6万人のうちタイ族が27.0万人（33.9%）、漢族20.2万人（25.3%）、その他の少数民族が32.4万人（40.7%）となっている（注1）（人口については次項で詳述する）。

西双版纳では古来より盆地の平野部にこの地方の有力民族であるタイ族が居住しており、水田稲作を中心とした農耕生活を行ってきた（注2）。気温の年較差が少なく、二毛作も可能な地域であるが、現在では稲の収量が少ない時期には換金作物である西瓜などの栽培をする農家が多い。一方、山地には焼畑農業を主とする山岳民族のハニ族やラグ族、ジノー族等が居住している。また、これらの民族の文化的形態には、日本文化と類似するものが多数指摘されており、照葉樹林文化として人類学の分野での研究が行なわれている（注3）。

2. 西双版纳における民族人口比の推移

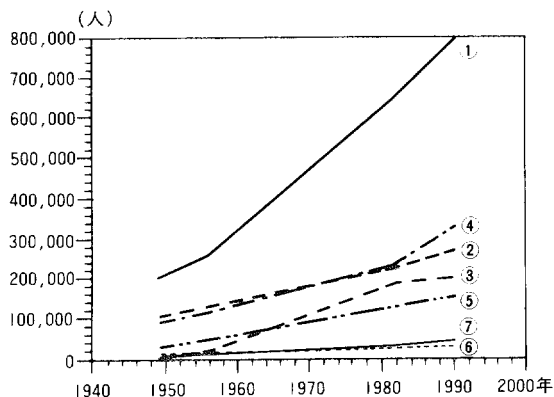
西双版纳タイ族自治州における人口は、新中国成立以後急激な増加を見せている（図1参照）。1949年の統計では、19.9万人であった州の総人口が、90年の統計では79.6万人となっており、

実にこの40年余りで4倍に急増したことになる。中でも漢族の増加は急激であり、1950年にこの地に人民解放軍が入った当時は、漢族の人口はわずか5000人、全人口の0.27%にすぎなかったものが、90年の統計では20.2万人にまで増加している（注4）。記録に残る漢族流入についての具体的な数字としては、1959年から翌60年にかけて湖南省から入植した2万5000人の農民と、文化大革命期に「下放」された中国各地の大学を卒業した知識青年6万6000人があげられるが、このような記録に残るもの以外にも多くの漢族が流入していることが分かる。そして、この漢族の少数民族居住地域への急激な流れは、中国の他の地域、たとえば北方の内モンゴル自治区や西域の新疆ウイグル自治区などでも同様のものである（注5）。

一方、少数民族の人口もこの40年で2倍以上に増加している。少数民族のうち、タイ族やジノー族など、この地域に集中していたり、他の地域に同じ民族がいても西双版纳から遠く離れた特定の地域に集住している民族については、図1に見る増加は自然増によるものと考えられるが、周辺他の地域にも広く分布しているハニ族等の場合には、自然増のほかにこの地に流入してきた者が社会増として加わっていることが考えられる。また、1982年以降、漢族には一人っ子政策が取られる一方で、少数民族に対するこの政策は緩やかであり、今後も自然増のペースにはさほど変化がないものと考えられる（注6）。

図2は、民族の比率の変化を示したものであるが、1949年に57%以上を占めていたタイ族の人口比率は年々低下し、1990年には33.9%になっている。当然ながら漢族の割合は急上昇し、

図1 西双版纳タイ族自治州における民族別人口の推移



①全体合計 ②タイ族 ③漢族 ④タイ族と漢族を除くその他の少数民族 ⑤ハニ族 ⑥ラグ族 ⑦ブーラン族

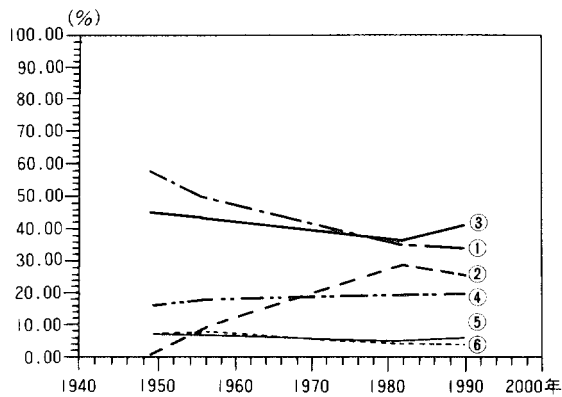
(出所) 張立呉垠編『西双版纳国土経済考察報告』昆明 雲南人民出版社 1990年 141ページと、雲南省人口普查辦公室編『雲南省第4次人口普查手工彙總資料』昆明 雲南人民出版社 1990年の記述をもとに筆者作成。

約25%を占めるに至っている。

このような新中国成立以降の急激な漢族の増加とは対照的に、1981年から90年の統計では漢族の全体に占める人口比が低下する傾向が読み取られる。しかし、後述するタイ族集落への漢族の移住や、市街地の拡大に伴って活発化する集合住宅の建設を見ても、この地域に流入する漢族の増加は疑いのないところである。このような現実と統計上の数値の差について、西版纳の政府経済計画局職員にその理由を尋ねたところ、近年他地域から流入している多数の人々は、戸籍上はもとの移住前の土地に登録されており、西版纳の人口統計には現われないとのことであった。

中国では人口の移動を管理するために「都市戸籍」と「農村戸籍」をもうけ、これらを自由に変更することはできない。しかし、1984年に

図2 西双版纳タイ族自治州における民族別人口の推移



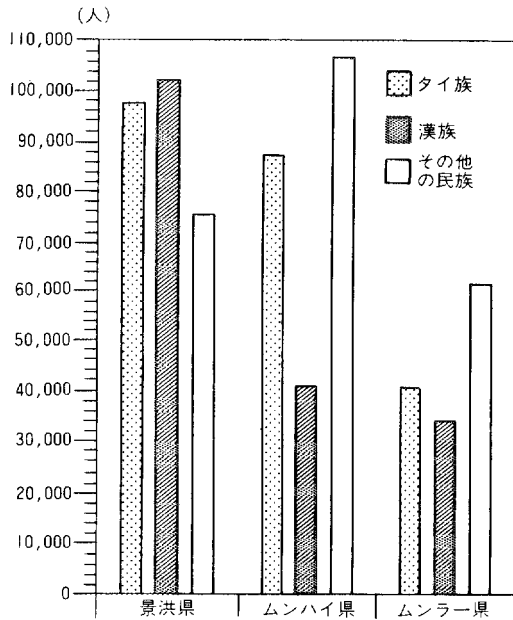
①タイ族 ②漢族 ③タイ族と漢族を除くその他の少数民族 ④ハニ族 ⑤ラグ族 ⑥ブーラン族

(出所) 図1と同じ。

出された「農民の集鎮転入、定住に関する国務院通達」による移動の一部自由化を引き金として、都市に流入する農村の余剰労働人口が急増したといわれ、その結果、都市には従来の都市戸籍所有者の他に、通達で自由化された範疇にはいる自弁（食糧配給が受けられない）の戸籍者と、まったく政府の保護が得られない「盲流」と呼ばれる人々が生まれたと言われる^(注7)。1984年の通達では、県城（県庁所在地）は移動のできる都市に含まれない。景洪は州都であり県庁所在地でもあるので、本来自由に移動できる都市には含まれないことになる。これらを鑑みれば、現在急激に景洪に流入している漢族のほとんどはこの「盲流」に当てはまることになり、人口増加が戸籍をもとにした統計に現われないのはむしろ当然といえる。

図3は、西版纳を構成する3つの県の民族別統計をグラフ化したものであるが、県ごとに漢族の人口に大きな開きのあることが分かる。

図3 西双版纳タイ族自治州における
県別民族人口(1982年)



(出所) 張立呉根編『西双版纳国土経済考察報告』昆明 雲南人民出版社 1990年 142ページの記述をもとに筆者作成。

景洪県では1982年の時点ですでに漢族の比率がタイ族を上回っているが、これは西双版纳で最も大きな都市である景洪に漢族が集中していることの他に、後述する国营農場が数多く建設された可能性もあげられる(注8)。

以上のようなわずかに垣間見られる統計からも、西双版纳における新中国成立以降の流入人口の急増は明白である。現在までのところ、このような人口の推移を詳細に示す統計は公表されていないが、わずかながらも残された移住に関する記録や、現在実際に見ることのできる多数の国营農場、近年都市部に急増している他省からの移住民などから、1950年代後半から60年代前半の国营農場への人口流入、文化大革命期の「下放」による人口の急増と文化大革命終了

直後の減少、90年代の「盲流」による都市人口の急増などを推測することは十分に可能である。したがってこれらの具体的な統計的数値の増減を示すことはできないが、移住民の移住の目的、性格、時代背景などから、前述のように漢族の流入を3期に分けて論述することが可能であると考えられる。

(注1) 雲南省人口普查辦公室編『雲南省第4次人口普查手工業総資料』参照。

(注2) 現在タイ族が生産する農作物は、穀物では伝統的に主食としてきた糯米の紫米や白米と政府に納める必要から収量の増加した粳米、野菜では菜の花、ホウレンソウ、韭、エンドウの芽、モヤシ、インゲン、トマト、胡瓜などが一般的である。さらに、唐芥子、ミント、レモングラスなどの香味野菜、日本のサトイモに近い薯類、ザボン、バナナなどの果物類、その他たけのこや砂糖黍などが一般に生産されている。吉野正敏編『雲南フィールドノート』古今書院 1993年 54~72ページ、および1991年10月の現地調査時の記録による。

(注3) 中尾佐助『照葉樹林文化の建築』(『建築雑誌』1979-1 1979年1月) 11~14ページ/石井溥「研究展望——照葉樹林文化論——」(『民族学研究』第49巻第3号 1984年12月) 273~280ページ参照。

(注4) 張立呉根編『西双版纳国土経済考察報告』/雲南省人口普查辦公室編『雲南省第4次人口普查手工業総資料』による。

(注5) 毛里和子・橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』山川出版社 1987年 452~486ページ参照。

(注6) 西双版纳の少数民族に対する「一人っ子政策」は、タイ族に対しては2人、山達人に対しては3人、ジノ族に対しては無制限など、民族によって対応が異なっているが、いずれにしても漢族に対する「一人っ子政策」の厳格さは見られない。

(注7) 若林敬子『中国：人口大国のゆくえ』(岩波新書) 岩波書店 1994年6月 128~129ページ参照。

(注8) 張立呉根編『西双版纳国土経済考察報告』付録の土地利用図によれば、景洪県には西双版纳全体の3分の2以上のゴム林が集中している。現在、西双版纳の多くの国营農場における主要な生産物がゴムであることを考えると、景洪県にはゴムを生産している国营農場が多数存在していると推測される。

II 国営農場建設における漢族移住 と少数民族

1. 1950年代～60年代の国営農場の建設と移住の歴史

前述のように新中国の成立した1949年以前には、西双版纳に居住する漢族はごく少数であった。そして、その後この地域に流入してきた漢族は、流入した時代によって大きく3期に分けることができるが、本節で扱う国営農場への移住はこの内の第1期である。

最初に西双版纳に移住してきた漢族は、1950年代後半に主に湖南省を中心とする地域から開拓団として入植した人々であるといわれている(注1)。彼らは新中国成立間もない毛沢東の熱狂の時代に、わずかな食糧のみを持ち、何日もかけてほとんど身ひとつでこの地に入植した若い農民たちである。彼らは集団で農場を開いたが、その農場は農業に適した水の豊かな平地ではなく、未開拓の山林の縁辺部を切り開いたものであった。このような土地に農場を開拓した理由は、まず平地には古来より有力なタイ族が居住しており、一方山地にはやはり古くから焼畑農業を行ってきた山岳民族のハニ族やジノ族、ラグ族などが居住していたからであろう。このような標高差による民族の住み分けは、民族間の闘争の中で11世紀頃に確立されたものと言われているが(注2)、漢族はこの平地民族と山岳民族の居住地域のちょうどさまを縫うように開拓地を広げていった(分布については本節第3項で詳述する)。

聞き取り調査によれば、1950年代の国営農場にはとにかく何もなく、簡単な掘っ立て小屋や

テントに住み、毎日が甚だしい飢えとの闘いであったということである。入植した人々のほとんどがまだ20歳前後の若者であったからこそ何とかその状況を凌げたのであろう。

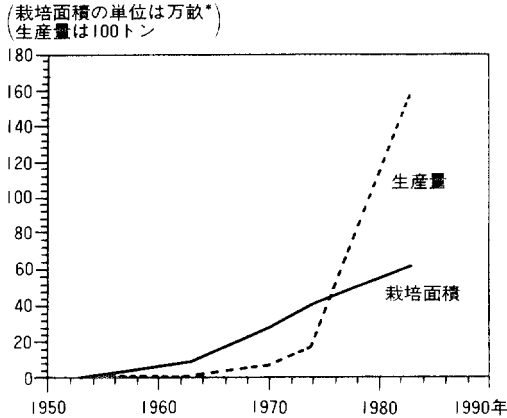
記録では1959年から翌60年に湖南省より2万5000人の農民がこの地域に移住してきたとあるが(注3)、聞き取り調査では59年以前にも相当数の人々が国営農場に移住していたようである。調査対象者の証言が正しいとすれば、調査を行なった国営農場の中で最も古いものは1953年の建設であった。また、湖南省のみならず、雲南省内部や四川省、貴州省などの雲南省に隣接する省、さらに安徽省や河北省などの比較的遠い地方からやってきた農民も確認された。

1960年代もこのような湖南省を中心とする他省からの移住は続くが、70年代以降は国営農場に加わる新たな農民は激減する。代わって1969年から74年には文化大革命の影響で、所謂「下放」(注4)された知識青年達6万6000人がこの地に入植するが、彼らについては移住の第2期として後述する。

2. 国営農場建設におけるゴム生産と農場人口の変化

国営農場を建設した当初は稲や稗などの穀類を中心に栽培していたようであるが、現在彼ら農民の中心的な生産物となっているゴムの栽培は、第2次世界大戦直後の1948年に中国系タイ人の銭方周によってはじめられたのが最初であるといわれる(注5)。その後中国政府が栽培実験を開始したのが1953年であり、56年頃から本格的な国営農場によるゴム栽培が行なわれるようになった。図4はゴムの栽培面積と生産量の伸びを示したものであるが、当然ながらゴムの樹が成長するまでの間に時間差があるため、生産

図4 西双版纳タイ族自治州における
ゴムの栽培面積と生産量



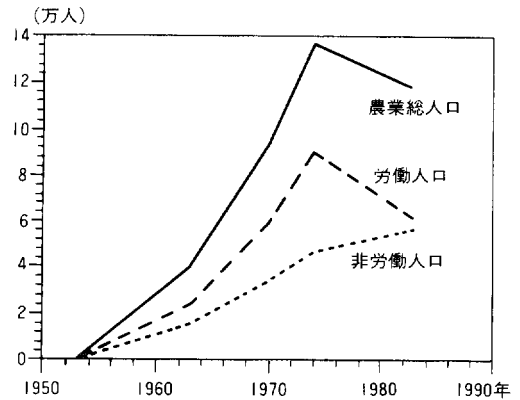
(出所) 張立呉根編『西双版纳国土経済考察報告』昆明 雲南人民出版社 1990年 185~200ページの記述をもとに筆者作成。
(注) * 1畝(ム)は6.667アール。

量の伸びは栽培面積に数年の遅れをもって伸びている。また、栽培面積の伸びが比較的一定であるのに対して、生産量は1974年以降著しい伸びを見せている。これはゴムの樹の成長が、ちょうどこの頃に採取に適した樹齢に達したためである(注6)。このような生産の伸びは生産者である国营農場の農民の生活にも大きく影響しており、近年のゴム生産によって彼らの生活は飛躍的に改善された様子であった。

1970年代前半までは国营農場のゴム生産の伸びにしたがって農民の数も増加するが、その状況を図5に示す。

前述のように1960年代後半までの伸びは湖南省などから流入する農民によるものであり、60年代後半から70年代前半までは下放された知識青年たちの流入によるものと考えられる。そして、1970年代後半からの落ち込みは下放されていた知識青年たちの多くが文化大革命後に帰郷

図5 西双版纳タイ族自治州における
ゴムの農場人口の推移



(出所) 図4と同じ。

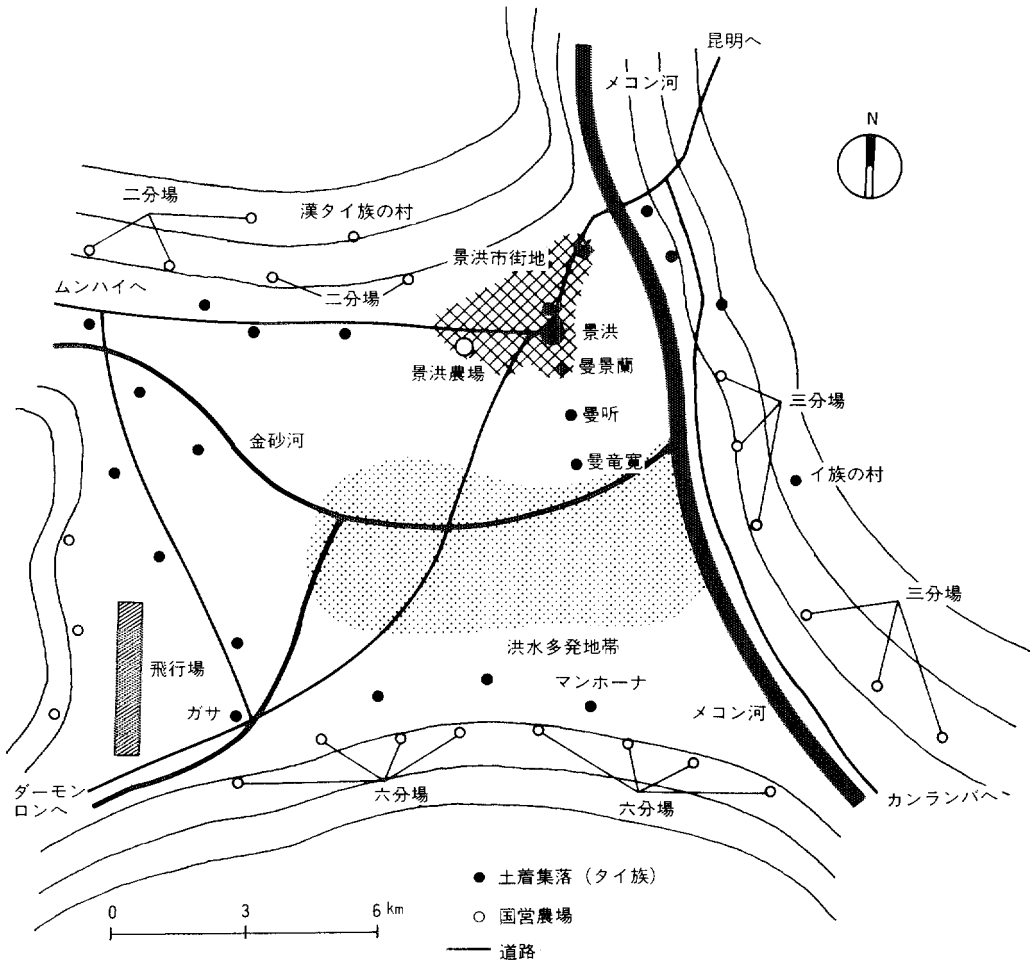
したためである。

近年のゴム生産の飛躍的な伸びに伴って国营農場の経営が安定してきたことや、西双版纳全体の統計に現われる漢族人口の増加などから、調査当初は新たに農場に加わる農民も増加しているのではないかと思われた。だが、国营農場での聞き取り調査によれば、このような生産量の伸びにもかかわらず、近年の国营農場における農民人口は一定しており、1970年代以降今日に至るまで、新たに農場に加わる農民の数は非常に少ないということである。

国营農場は前述のとおり〇分場〇隊の名称を持ち、数多くの分隊を生み出しているが、これはゴムの栽培面積と生産量が急増するにしたがって分隊していったものであり、特に近年においては人口増加が分隊の直接の契機にはなっていないようである。

中国の退職年齢が57歳ということもあって、一世たちのほとんどはすでに退職している一方で、現在農場の労働力の主力になっているのは、1950年代から60年代にかけて移住してきた

図6 国営農場の分布（模式図）



(出所) 《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編『傣族社会歴史調査（西双版纳之四）』
 昆明 雲南人民出版社 1983年8月に掲載されている地図をもとに現地調査の結果を記
 録し筆者が作成したが、もとの地図が不正確であるので、模式図として掲げる。
 (注) 縮尺はおおよその目安である。

農民の二世たちである。図5には農場の総人口から労働人口を引いた非労働人口も示しているが、この図からも分かるとおり、農場人口の総数が減少に転じたにもかかわらず、非労働人口は依然として増加し続けている。1950年代～60年代の非労働人口では労働年齢に達しない若年層が中心であったのに対して、近年の非労働人

口の多くは老齡の退職者ではないかと考えられる。また、一人っ子政策はこの辺境の農場でも厳格に実施されているので、中国の他の地域と同様、農場人口における若年層の比率はかなり減少しているはずである。実際に最近の国営農場の老齡化はかなり進んでいる様子がうかがえるが、それは単に日中から外で過ごす老人たち

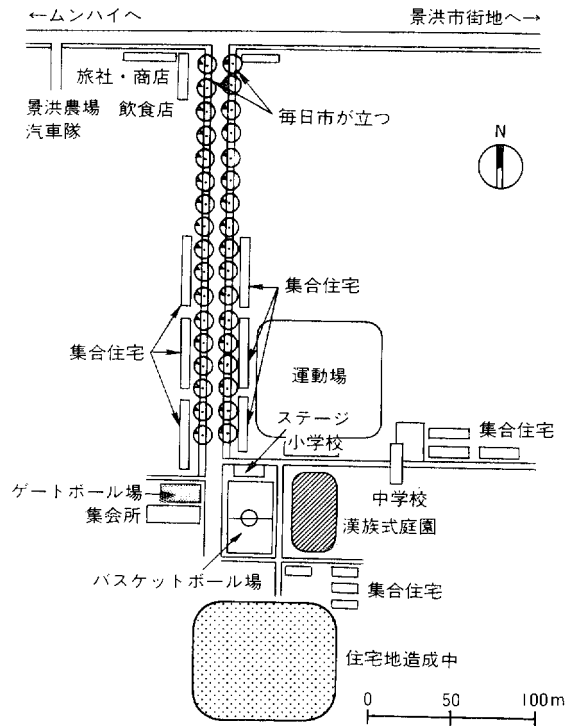
の姿が目立つということばかりではなく、次項で見るように農場の居住地区の空間構成の変化にも見て取ることができる。

3. 国营農場の分布とその空間構成

西双版纳景洪盆地周辺における国营農場の分布を図6に模式的に示す^(注7)。1950年代に西双版纳に流入した漢族は山林の縁辺部に農場を築いていったが、このような地点はまたゴム栽培に適した所でもあった。西双版纳のゴムは景洪の熱帯作物研究所が開発した耐寒性のゴムであるが、もともと熱帯地方の作物だけに亜熱帯の西双版纳で現在のように栽培されるようになるまでには、多くの試行錯誤を経る必要があった^(注8)。耐寒性のゴムとはいえ標高が高く気温の低いところでは成育できないので、必然的に山地の主に南側斜面の裾野に栽培地が広がることになるが、ゴム栽培の必要上から国营農場が山林の縁辺部に広がっていったのか、先に述べたように平地民族居住地と山岳民族居住地のはざまにしか入植の土地がなかったために、そこを縫うように広がっていったのかを判別することは難しい。恐らくその両方の要因が入りまじっていたのではないかと考えられる。

他地域の国营農場についての資料は入手していないので、西双版纳の国营農場についてしか語れないが、ある時期まで(1980年代末頃まで)の西双版纳の国营農場は、どの国营農場でも判を押したように基本的に同じ空間構成を持っていた。それは中心にバスケットボール場を持ち、それに面するように集会所がある(小規模なものではバスケット場が集会所を兼ねる場合もある)。やや規模の大きな農場ではこれに漢族式の庭園が付き、さらに大規模なものでは学校が加わる。そして、それらの周辺に長屋形式の住戸が立ち

図7 国营農場の空間構成(景洪農場)



(出所) 1991年の現地調査時に筆者作成。

並ぶというものである(図7参照)。これらの特徴を持つために国营農場と他の集落を判別するのはきわめて容易である。また少数民族の集落とは違って山中に孤立して建設されるようなことはほとんどなく、主要作物であるゴムを輸送する必要性もあって、必ず幹線道路に連絡するように建設されるようである。

これらの国营農場も近年多少変化した点がある。まずゴム栽培が急増したことにより、ゴムの樹液を集める収集所が大きな役割を果たすことになり、個人の生産割当などが常に張り出されているために、ここが農場経済の中心になりつつある。また農場の人口構成が高齢化したことにより、最近ではバスケットボール場に隣接

したり、あるいはバスケットボール場を取り壊して老人のためのゲートボール場が居住区の中心に据えられるようになってきている。

これらの事柄は、国営農場人口の高齢化を象徴的に示すと同時に、近年のゴム生産の伸びが多数の非労働人口を支えられるようになったことを示しているといえる。加えて、統計的な資料は入手できなかったが、どの国営農場にも少数民族出身の農民がおり、ゴム栽培地の面積拡大によって、かつてゴム園周辺に居住していた少数民族がゴム栽培に加わる例が徐々に増加している様子をうかがい知ることができる。

4. 地域開発のプロセスにおける国営農場と少数民族への影響

漢族が少数民族に与えた影響は多方面にわたるが、この影響は時代と共に変化していると考えられる。これまでの調査をもとに、図8では地域開発のプロセスを国営農場の果たした役割を中心に提示している。以下この図にそって、先住少数民族（タイ族）居住地域に漢族が居住地を拡大していくプロセスと先住民族への影響について説明する。

まず漢族流入以前は、宣尉街^(注9)のような有力な集落は存在したものの、比較的均一な規模を持ったタイ族の集落が主に平野部に分布していた。山地には低い方からハニ族、ラグ族、ジノ族などが標高差の順に住み分けを行っていた（図8-a）。

1950年に景洪に人民解放軍が入り、翌年人民政府が置かれると先住タイ族の封建領主制はまもなく廃止された。そして、景洪地区では1954年前後までに共産主義思想にもとづく土地の再分配が行なわれている^(注10)。この時期に漢族の流入が開始されて以後、先住少数民族にも本格的な貨幣経済がもたらされることになった^(注11)。

また人民政府に加え、人民解放軍の施設も都市建設の最初期に建設されている（図8-b）。

1950年代後半から本格的な国営農場の建設が始まるが、それらは平地民族と山岳民族の居住地のはざまを縫うように建設されていった（図8-c）。

特に経済作物の生産を促した点で、国営農場の果たした役割は大きかった。漢族流入以前の先住少数民族はその自給自足的生活習慣から、商品作物、あるいは換金作物といった概念は極めて薄かったと考えられるが、漢族の流入以降、少数民族の間にもゴムや茶、サトウキビなどの商品作物を生産する者が増加している^(注12)。また、漢族が建設した道路網と都市の商業施設により、地域間の交易がそれまで以上に活発に行なわれるようになったことも容易に想像される。

農業についての新しい技術もやはり国営農場を通じて先住民族に伝わったが、それらはゴム栽培などの新しい経済作物に対する知識が主なものであった。一時期タイ族にも強制された集団農場化の時代は、先住民族にとっては苛酷なものであり、そのときもたらされたスプリンクラー等の水利技術は、すぐに目詰まりがしてほとんど役に立たなかったと伝えられている。他方ゴムの栽培については、特に山岳民族に対しては政府が援助資金を提供したり国有林を開放して、その普及に大きく関与している^(注13)。

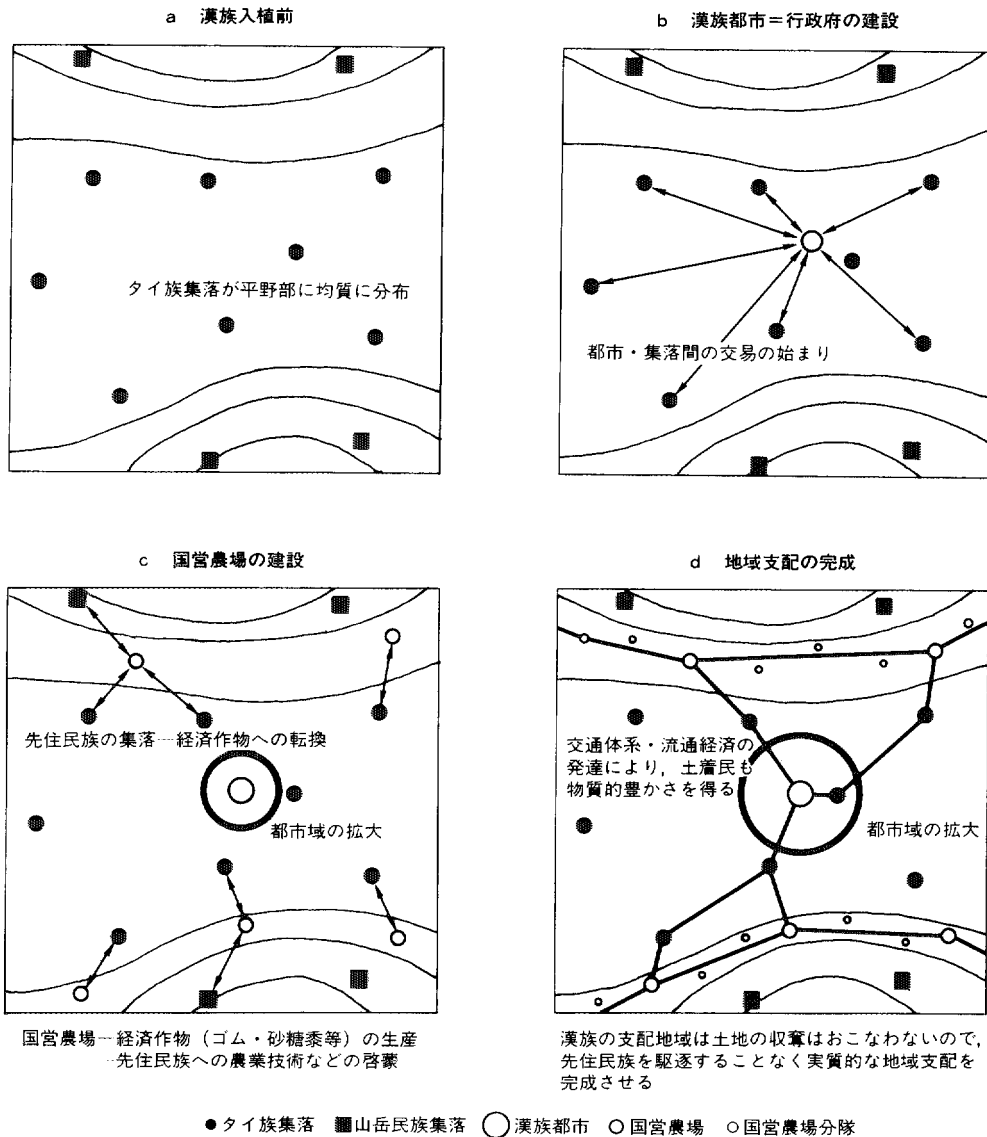
国営農場の建設に伴ってそれら結び付ける道路網の整備も進んだ。ゴム生産が主流になるにしたがって、採取したゴムを収集するためのタンクローリーなど大型車両の交通を確保しなければならなかったからでもある。そして、道路網の整備にともなって経済活動も活発化し、

中心都市景洪の経済的比重はますます大きくなってきている(図8-d)。このような過程の中で、近年先住民族の中にはその栽培だけでなく、独自の工場を持って生ゴムの生産にも従事するようになった者もいるが、これらは明らか

に国营農場とその管理に係わる政府の影響である(注14)。

以上のような先住少数民族の居住地に国营農場が地域を拡大していく過程で、目立った少数民族との紛争は起こらなかった。タイ族の年配

図8 漢族の地域開発のプロセス



(出所) これまでの調査をもとに筆者作成。

者の話によれば、それは皆無ではなかったということであり、記録が残されていないので具体的に明らかにすることはできないが、少なくともチベットや新疆などで発生したような激しい民族紛争には発展しなかった。以下にその理由について考えてみる。

まず第1に、農場を建設した漢族と同等以上に、漢族の流入によって先住少数民族にもたらされた利益が大きかったためであろう。たとえば漢族流入以降、多くの工業製品が流入したために、少数民族の物質的な生活は以前とは比較にならないほど豊かになった。また交通の発達も全く閉ざされた辺境の地と外界とを初めて結び付けることになった。さらに現代的な教育の普及や医療技術などは、少数民族にとって計り知れない利益であったと考えられる。

第2には、平地に居住するタイ族と山地に居住する山岳少数民族のはざまに漢族が流入したことである。これがもし生産性が高く農業に有利な平地に強引に進出していたとすれば、先住民族との間に強い軋轢を生じさせることになったのではないだろうか。

第3には、国営農場を建設するために入植した漢族のほとんどが農民であり、先住民から物資を搾取することなく入植を完了したことである。ただし、この過程では入植した漢族農民は多大な犠牲を払わせられることになり、彼らは甚だしい食糧不足に苦しめられることになった。

第4に、国営農場の建設はそれらをネットワークする道路建設を伴って行なわれたが、漢族が一見地域全体を支配しているかに見えて、実際には線的な緩い地域支配にとどまっていることである。先住民族の土地を収奪することはなかったため、地域の末端で土地をめぐる争いが

起こることは少ないが、その一方で景洪市街地に接して辺境防衛軍、人民解放軍、武装警察隊などが配置されており、有事の際には整備された道路網を通じて迅速に駆けつけることを可能にしている。

第5には、漢族と西双版纳の少数民族との交流が歴史的に非常に古い時代から続いており、互いに影響しあってきたために、新中国成立以降の漢族流入に対しても大きな拒否反応がなかったのではないかと考えられることである。1900年代のはじめにこの地に入ったアメリカ人の宣教師の記録からも、タイ族と漢族は古くから交易などを通して関係を保ってきたことがわかる^(注15)。

おおよそ以上のことが、この地域に流入した漢族と先住少数民族との良好な関係を保ってきたことに貢献している要因ではないかと考えられる。

(注1) 張立呉垠編『西双版纳国土経済考察報告』140ページ参照。

(注2) 古島琴子『中国西南の少数民族——生活文化を探る旅——』サイマル出版会 1987年参照。

(注3) 張立呉垠編『西双版纳国土経済考察報告』140ページ参照。

(注4) 文化大革命の時期には多くの知識階級の人々が弾圧の対象になった。大学卒業生もこの階級に含まれるものとして多くが農村での労働に従事させられたが、これを下放という。

(注5) 吉野編『雲南フィールドノート』48～51ページ参照。

(注6) 図3および図4のデータは(注1)の参考文献の記述をもとにまとめたものである。ゴムの最初の収穫までの期間は4～7年、成熟年数は8～11年、収穫可能年数は35年であり、図3にみる時間差はこの時間差を反映したものである。

(注7) 中国で正確な地図を入手するのはきわめて難しい。景洪周辺の地図も入手できないので、《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編『傣族社会歴史調査(西双版纳)

版納之四)』昆明 雲南民族出版社 1983年8月の地図(これはかなりデフォルメされた地図であるので集落間の距離などは事実と異なる)と現地ですべての観光用の地図(『西双版纳旅游交通圖』成都 成都地圖出版社)をおおよその手掛かりとして地図を作成し、これに実際に調査を行なった集落と国営農場の位置を書き入れている。集落数、国営農場の数には大きな狂いはないが、それらの間の距離は正確ではないので模式図として掲げる。したがって地図の縮尺もおおよその目安である。

(注8) 吉野編『雲南フィールドノート』48～51ページ参照。

(注9) 宣尉街には新中国以前は封建領主の館がおかれ、この地方のタイ族政治の中心であったと伝えられる。位置は現在の景洪の南数キロメートルのところであったが、文化大革命の時期に徹底的な破壊を受け、現在はその痕跡を認めることも難しい。

(注10) ≪民族問題五種叢書≫雲南省編輯委員会編『傣族社会歴史調査(西双版纳之四)』1983年8月 121～138ページ参照。

(注11) 漢族流入以前は「半開」という一種の通貨が用いられていたが、それらは非常に高額な取引にのみ用いられたものであり(たとえば1950年代の中国科学院民族研究所をはじめとする調査記録によれば、新中国成立直後、金1両(50グラム)=250～300半開=250万～300万人民币換算であった)、今日の一般的な貨幣とはかけ離れた性格のものであったと思われる。なお、この「半開」に代わって人民元が西双版纳で広く普及するのは、州政府が「半開採取制限」を決議して以降であるということであるが、その決議がいつ行なわれたのかについては記載がなく不明である。≪民族問題五種叢書≫雲南省編輯委員会編『傣族社会歴史調査(西双版纳之十)』1987年1月 1～7ページ参照。

(注12) 大林他「近代化と少数民族社会の対応」78～89ページ参照。

(注13) 同上論文 78～89ページ参照。

(注14) 現在では、採集したゴムの樹液は、集落やゴム園に隣接する収集場に集められた後、タンクローリー車によって工場に集められ加工される。一方、国営農場に属さない少数民族のゴム生産者たちは、樹液を20～30錠ほどの潰れたボール状に固め、それぞれの納屋などに收藏した後、特定の集配所で直接加工工場に売り渡している。国営農場やゴム園に隣接して設置された樹液収集所のほとんどが近年建設されたものであることを考慮す

ると、現在のようなタンクローリー車による集配システムができたのは、比較的最近になってのことではないかと推測され、それ以前は現在の少数民族のような集配方法がとられていたのではないだろうか。

(注15) 岩宰「西双版纳伝播基督教見聞」(『版纳文史資料選輯—7』昆明 雲南民族出版社)220～227ページ参照。

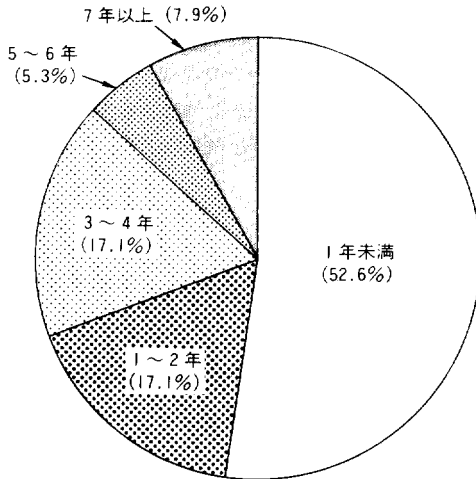
III 改革開放政策以降の漢族移住

1. 文化大革命期の漢族移住と改革開放政策以降の漢族移住の特色

文化大革命時代に流入した漢族は、漢族流入の第2期ととらえることができる。既述のようにこの時期に流入した漢族は、全国各地の大学を卒業後に下放された知識青年6万6000人であったとされるが、彼らのその後の動向について正確に把握することはできなかった。だが、一般に伝えられるように文化大革命終了以降にそのほとんど全てが帰郷してしまったとは言えないようであった。一般化できるほどの事例を集めることはできなかったが、多くの若者たちが政府の要職を得たり学校の教師としてこの地に残ったということである。政府の若い職員などの話から、農業技術者として農民を指導したり教育に携わったりと、目に見えない部分での文革期の移住者の影響は、意外に大きいことが推測された。

文革期の漢族移住が一段落した後も漢族の流入が続いていることが先の図1などからも分かるが、特に改革開放路線が明確にされ、中国経済全体が過熱気味の1980年代後半以降、漢族の流入は加速的に進行しているようである。本論文ではこれを漢族移住の第3期としてとらえる。

図9 西双版纳における流入人口の居住年数



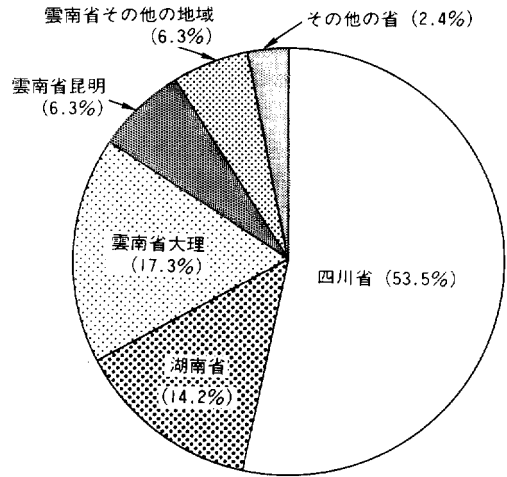
(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

第1節で示唆したとおり、近年景洪に流入している人々の多くは、中国の沿海部の大都市に殺到して深刻な社会問題となっている「盲流」の流れと基本的に同じである可能性が高い。図9は被調査者が景洪に居住してからの時間を示すものであるが、この図からも分かるとおり、市場経済が過熱するとともに「盲流」が社会問題として注目を集めはじめた1990年代に入ってから流入者が全体の8割以上を占め、特にこの1年以内に流入した者が過半数を越えている。また、7年以上と答えた者は文化大革命期や新中国成立直後にこの地域に流入した者か、その二世である。

2. 流入人口の人口構成と職種構成

聞き取り調査の結果明らかになった流入人口の出身地別の割合を図10に示す。この結果からは、全体に占める四川省出身者が過半数を超えており、雲南省内部からの移住者(約30%)をも大きく上回っていることが分かる。また、地理的にやや離れているものの湖南省からの移住

図10 流入人口の出身地別構成

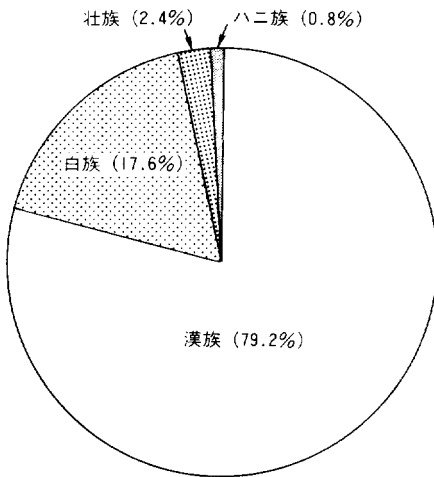


(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

者の占める割合も大きい。この四川省、雲南省、湖南省の上位3省で、全体の97%以上を占めている。これ以外の省から移住した者は聞き取り調査の範囲ではごく少数であり、湖北省、浙江省、貴州省からの移住者であった。

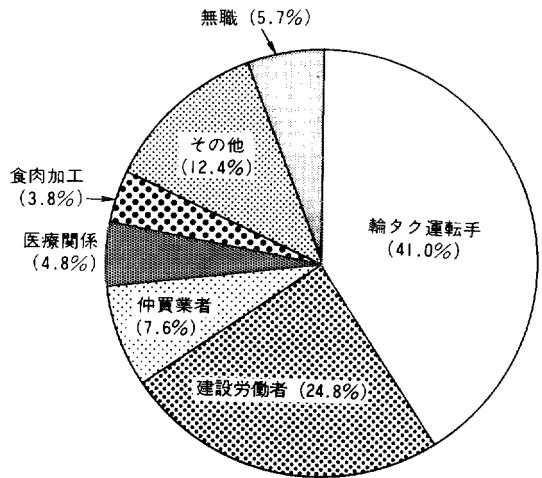
このグラフには現われないが、四川省・湖南省からと雲南省内部からの移住者の移住の仕方には、明らかな違いが見られる。それは、前者の場合には村単位で地縁関係を保ちながら順次移住してくる傾向が強いのに対して、後者ではそのような関係が薄く、せいぜい家族単位での移住であることである。前者のような地縁関係の組織は「幫」と呼ばれるが、これはアメリカ大陸やヨーロッパに移民した中国人の華僑社会(華僑の出身地は福建省や広東省が多い)に根強く残る地縁関係をもとにした互助組織と共通するものである。ほぼ同様のものが四川省や湖南省から西双版纳に移住してきた人々の間にも見られるのは興味深い。このような「幫」による絆は非常に強く、一つの高床式住居の床下に居住

図11 流入人口の民族別構成



(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

図12 流入人口の職業別構成



(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

する人々は、多くの場合一つの地域からの移住者達で占められる傾向にあり、後述するように職業的にも結び付いている場合が多い。

民族別の割合は図11に示すとおりであるが、全体の約8割を漢族が占める一方で、他の少数民族の移住者も少なからぬ割合で含まれていることが分かる。特に雲南省大理からの白族の移住者の数はその大部分を占めている。農村の余剰労働人口ということでは、大理も四川省などと同じ状況を呈していることが推測されるが、大理と西双版纳が直接長距離バス路線で結ばれるようになった影響も大きいのではないかと考えられる。

流入人口の職種別の割合を図12に示す。この結果からは、移住者達の職業で最も多いのは輪タク運転手であることが分かる。輪タクは個人が経営しているわけではなく、全て会社組織により運営されているが、この職種には特に四川出身者が多い。輪タクは1990年の春頃から西双版纳に現われたが、市内の公共交通機関が整っ

ていない景洪市にあって、94年現在では動力付きのものも含め約400台が稼働しているとのことである^(注1)。

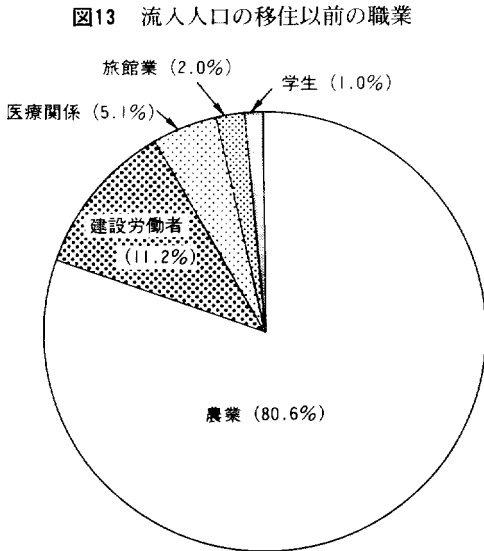
輪タク運転手の次に多いのは建設労働者であったが、彼らは建設現場の建設途中の建物に寝泊まりしているものも多く、集落内を調査しただけではその実数を把握することは難しい。調査対象の範囲を拡大すれば、現在建設ラッシュの続く西双版纳にあっては、建設労働者の割合がさらに増えるのではないだろうか。

輪タク運転手と建設労働者で全体の6割以上を占めているので、その他の職種の割合はかなり少なくなる。仲買業者は雲南省出身者に多く、西双版纳でバナナやパイナップルなどの南国の果物を仕入れ、北部の地方に運んで売る、というケースが多い。彼らの場合にはできるだけ安い宿泊場所を求めてタイ族の集落内に一時的に住んでいる者たちであり、他の移住者たちのように定住しているとはいえず、家族を昆明などに残してきている者がほとんどである。

医療関係の職種についている者は、ここで取り上げている改革開放政策の影響によって流入した人々ではなく、文化大革命期までにこの地に送り込まれ、文化大革命後も残留した人々である。したがって、彼らは集落内に住んでいるものの、後述する床下アパートにではなく、病院に付設の宿舎に住んでいる。

食肉加工業を営むものが4名弱ある他、その他の職種の中には家具職人^(注2)、廃品回収業などの肉体労働が多く含まれる。また、無職と答えた者も約6名あり、彼らは前述のような地縁関係をたどって景洪にやって来たばかりの者たちである。彼らは日雇いでその日その日を送っているということであるが、「耜」を後ろ盾としているためか、さほど困窮している様子はみられない。

移住前の職業が何であったかを尋ねた結果が図13であるが、そのほとんどが農業であり、中国の農村の余剰労働人口のあり様を如実に示し



(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

ていると言える。また移住前も建設労働者だった者は現在でも同じ職業を続けている場合が多いが、彼らはある程度の技術を身に付けている者たちであろう。

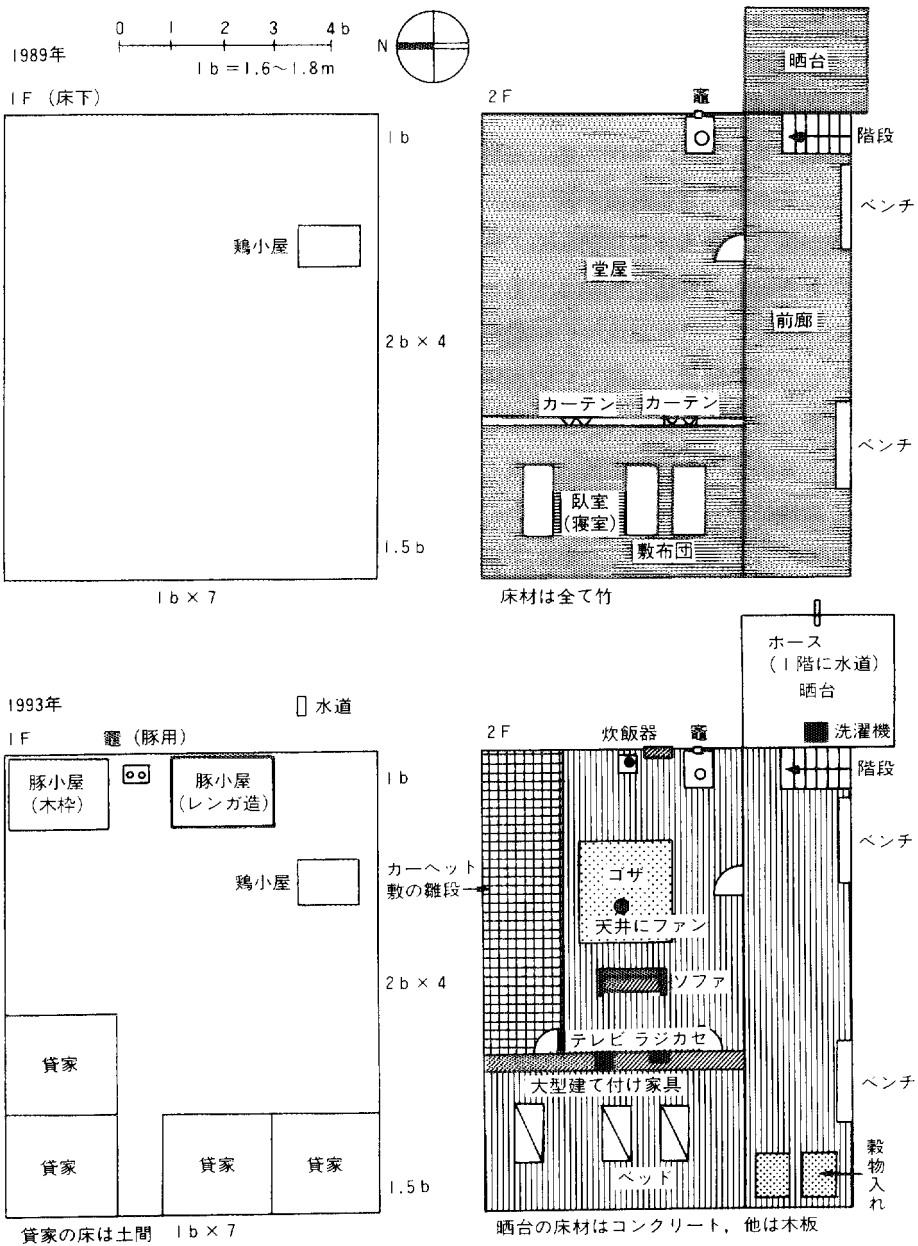
聞き取り調査の際に彼らの生活について尋ねたところ、移住した漢族の多くは、経済的な厳しさなどから春節にもめったに帰郷することはないということであるが、かといって西双版纳に定住しようというはっきりした意識は見られない。経済的には決して恵まれているとは言えないが、それでも以前の故郷での暮らしよりも現在の方が良いと考えているものがほとんどである。それだけ現在の中国の農村の暮らしが厳しいということを反映しているのではないだろうか。

3. 漢族移住者の生活環境

1950年代から60年代の漢族移住者達が、先住の少数民族と影響しあいながらも独立した農場を建設していったのに対して、改革開放政策の流れの中で西双版纳に流入した移住者たちは、その大部分が都市とその周辺の集落に居住しており、先住の少数民族とより強い共存関係を有している。特にその居住空間については、タイ族の伝統的住居形態である高床式住居の床下の空間を仕切り、2～3世帯から多いものでは10数世帯もの移住者がひとつの高床式住居の床下に居住している。

このような居住形態が現われた原因を漢族とタイ族の側に分けて考察する。まず漢族側の要因としては、既述のように景洪に流入してくる人々の多くが政府の保護を受けられない「盲流」であり、景洪に居住するために必要な正当な戸籍を有さないために、一般的な集合住宅に入居することが不可能なことがあげられる。ま

図14 伝統的高床式住宅の変化



(出所) 1989年および1993年の現地調査により筆者作成。

(注) (1)図は同一住宅における変化の記録であるが、床下空間の変化のみならず、住宅内の家具・建材にも大きな変化が見られる。(2)住宅の建設年は1987年。農業を生業とし、4人家族。(3)タイ族の住宅には人体寸法が用いられており、1バー(図中1 bで表示)は両腕を広げた長さで1.6~1.8mである。なお図中では柱間の長さとその数が分かるように表示してあるが、たとえば1 b × 7は1バーの長さの柱間が7つあるということであり、2 b × 4は2バーの長さの柱間が4つあるということである。

た、彼らはもともと貧しい農村の余剰労働力として、いわばその社会からはじき出された人々であり、アパートの使用権を取得することは経済的にも非常に困難であろう。

他方、西双版纳のタイ族は、中国の他の地域の少数民族に比べてかなり自治意識が強く、今日のように漢族が集落に流入する以前から、旅行者や行商人などを彼らの住居に民泊させることを普通に行なっていた。これは人々の移動を管理する手段として宿泊施設にも厳しい管理体制をしく中国にあっては、きわめて異例なことである。そして、このような状況が流入する人々を受け入れる素地になっていたことは疑いのないところである。

後述するように、現在ではタイ族が床下を賃貸することによって現金収入を得ようとする意識も相当に強い。だが、このような居住形態がはじまる端緒には、合法的、経済的に住宅を得られない流入者と、漢族に対して強い自治意識をもち、自らの土地や住宅について自由に使う権利を当然のこととするタイ族の側の状況が、うまく合致したということがあるのではないだろうか。

次に具体的な住居形態について見てみたい。図14は伝統的な高床式住居が、床下に賃貸部屋を持つ住居に変化した典型的な例を示している。かつては放し飼いの家畜が徘徊するスペースであった床下空間を流入する人々のアパートとして利用する住居が、現在では曼景蘭全体の住居の3分の2以上に達している。

このような居住形態が調査対象集落の曼景蘭で見られるようになったのは1991年末頃からであるが、その後流入する漢族が増加するにしたがって、この居住形態が急激に普及していった。

当初は高床式住居の床下を木の板壁で仕切っただけの簡素なものであったが、その後レンガ壁で仕切ったより恒久的なものとなり、最近にいたってはタイ族住居の建設当初から賃貸部屋を考慮して建設が行なわれる場合も珍しくなくなった。その結果、タイ族の伝統的住居形態である高床式住居の形態も大きく変化している。

4. 漢族移住による先住民族への影響

先に床下部屋の賃貸業がはじまる原因について見たが、ここではその拡大の経緯とその後の先住民族に対する影響について考察する。筆者が景洪地区における住宅の悉皆調査をはじめたのは1989年からであるが、この時はタイ族集落に漢族が居住するということが例外的な場合^(注3)を除いては、全く見られなかった。1991年10月の調査時に、高床式住居の床下空間を仕切って外部からの流入者が住まう現象が最初に見られたが、これは廃品回収業を営むタイ族がその従業員としての漢族を床下に住まわせていたもので、賃貸業そのものが目的ではなかった。ところが、1993年10月の調査時においては、調査対象集落（曼景蘭）のほとんど全てのタイ族世帯で何らかの賃貸業が行なわれている。明らかに言えることは、この2年の間にまたたく間に賃貸業が広がったことであり、農業を基盤としていた先住タイ族の社会的構造が、短期間のうちに大きく変化しつつあるということである。

1993年10月の聞き取り調査によれば、この賃貸業、または土地や住宅の使用権の売買に最も影響があったのは、88年頃から曼景蘭の曼听路^{マンティンルー}^(注4)沿いにタイ族レストランを開き、この通りを西双版纳の観光名所にまで高めた元レストランの経営者達であると推測された。元来、先住のタイ族には土地や住宅の使用権を貸して現金

を得るという習慣はなかったが、観光地として注目を集める西双版纳において、大々的にレストラン経営を行なおうという漢族の側からの申し出が先行し、その多額な使用権料のために他のレストランも次々と追随した状況がうかがわれる。

またもう一方では、景洪市街地の中心近くに位置し、都市の拡大にしたがって完全に市街地に取り込まれてしまった曼允^{マンイン}というかつての農村集落があるが、ここでは漢族の居住区と長らく隣接していたために、他の地域に先んじて漢族と先住のタイ族が同じ居住区内に住む状況が生まれていた。そして、床下の賃貸をはじめたのも景洪ではこの集落が最初である。その後、ここで行なわれていた賃貸業が流入人口の急増という状況と相俟って、曼景蘭に飛び火したのではないだろうか。

では、このような賃貸業が先住民のタイ族にどのような影響をもたらしているのだろうか。まず、最も大きな影響をもたらしたのは、賃貸料による大きな現金収入である。その賃貸、あるいは使用権については、レストランの場合、契約期間は10年間というのが一般的であり、年間の使用権料は4万～5万円ということである。西双版纳の政府職員の年間給与は2000元程度であるが^(注5)、その20倍以上の使用権料を得ることになる。

高床式住居の床下を貸している場合では、その部屋の条件によって賃貸料も大きく異なり、相場は1カ月60～200元程度である。最も一般的な床下部屋は、広さ2畳にも満たないもので、窓はなく、ベッドを入れるとほとんど部屋がいっぱいになってしまう。だが、このようなものでも月70元程度は必要であり、西双版纳の物価

水準から考えればかなり高額な賃貸料と言わざるをえない。他方、賃貸料を受け取るタイ族の方では、一戸の高床式住居の床下で、少ないもので数世帯、多いものでは十数世帯分の床下部屋を有している。そのため月々に得る賃貸料収入は、数百元から1000元以上にも達し、これは西双版纳の一般的給与水準と比してかなり高額な収入である。

では、このような収入を得ることになったタイ族には、どのような変化が生じているだろうか。最も顕著なのは、それまでの農業や飲食店の経営といった労働から解放されたために、本来ならば働き盛りの30代から40代のタイ族男性の多くが、早々と隠退してしまったことである。一般化することの難しい点ではあるが、1991年の調査時には特定の労働に従事していた彼らが、現在では日中から酒を酌み交わしたり、手持ちぶさたに目抜き通りをふらついている姿をよく目にするようになった。また、これらの新たな有閑層を目当てとして、1991年まで集落内では見ることのなかったカラオケバーや、その体裁をかりた事実上の売春宿などが出現している。当然ながら、これらの娯楽施設によって集落の雰囲気も変わることになった。

一方、西双版纳外部からの余剰労働人口が大量に流入した影響によって、地元のタイ族の若者が職に就けないという事態が生じている。特に彼らの場合は、一方で親たちが高額の賃貸収入を得ているということもあって、特にすぐに働かなければならないという危機感はなく、今さら重労働と低賃金を強いられる農業や建設労働などの仕事には就きたくない、という意識がある。また、大学などへの進学も入学定員が非常に限られているためにかなり難しく、結果的

に若者を中心とする多くの遊休労働力を作り出しており、潜在的な社会問題となっている。

第Ⅱ節で国営農場の建設における漢族の移住について見たように、改革開放政策の中でこの地に移住してきた漢族と先住民族との関係が比較的良好である理由について考えれば、それはすでに明らかなように、先住のタイ族住民の方が現在のところ圧倒的な経済的優位を得ているためであろう。漢族の移住者がタイ族住民の高床式住居の床下に数多く居住しはじめたことによって、多くのタイ族住民に非常に大きな現金収入がもたらされ、彼らは物質的に豊かな生活を享受している。加えてタイ族住民が床上の広い居住スペースに住み暮らしていることは、精神的にも大きな優越感を与えているようである。このような環境からタイ族の側に不満が起こるとは考えにくく、仮に中国の政治的情勢が今後とも安定していくとすれば、漢族とタイ族の現状の共存状態は、今後もしばらく続くことになるのではないだろうか。

(注1) 雲南省人民政府経済計画局職員からの情報提供による。なお、輪タク組織の詳しい運営形態については未調査であり、今後の課題とした。

(注2) タイ族の生活が豊かになるにしたがって、もともとほとんど家具を所有しなかったタイ族の住居内にも家具が増えてきた。特に最近では居間と寝室の間の板壁の代わりに大型の建て付け型の家具を置くことが流行し、他省からやってきた家具職人の数も増加している。この建て付け家具とは、高さは2m前後であるが、横幅は部屋の幅いっぱいにとるもので、大型の住居の場合にはその幅が10m以上に達するものもある(図14参照)。このような家具の購入には数千円から1万円以上かかる場合もあり、タイ族にとっては一種のステータス・シンボルになっている。また、景洪の家具製造業には、このような地元のタイ族向けの家具製造業者と、主に西双版纳の外に出荷する竹製の椅子やテーブルなどを製造する家具製造業者がいる。

(注3) 調査対象集落としてきた曼景蘭、曼听、曼竜寛の3集落のうち、曼听に1家族だけタイ族に民族登録を変更したという元漢族が居住している。また、1988年頃から増えはじめたタイ族レストランには、91年以前も漢族の若者が従業員として住み込みで働いていた。

(注4) 1988年頃、1本の集落内幹線道路でしかなかった曼听路に、観光客を相手とするタイ族レストランが立ちはじめた。その後急速に民宿やレストランが立ち並び、現在では西双版纳の名物通りとなっている。

(注5) 中国人の年収は地域によって大きく異なるが、これは1994年5月現在西双版纳の政府職員の給与額である。

Ⅳ おわりに

——少数民族居住地域への漢族移住とその先住民族への影響——

本論文においては、少数民族居住地域に漢族が移住し、その生活域を拡大していく過程と、それが先住民族であるタイ族にどのような影響を与えてきたかについて分析するとともに、先住民族と漢族との間で保たれている比較的良好な民族間の関係についても言及してきた。この中で明らかになったことを整理して結語とした。

まず全体的な漢族移住の流れについては、以下のように要約される。

(1) 西双版纳の漢族人口の推移、国営農場の人口の推移、移住についての記録、1991年以降のタイ族集落への漢族の流入などから、西双版纳への漢族の移住は、第1期の国営農場建設期の漢族移住、第2期の文化大革命時代の下放による漢族移住、第3期の改革開放政策下での漢族移住、の3期に分けられる。

(2) 西双版纳にも中国の他の少数民族居住地域同様、新中国成立以降急激に漢族が流入している。1980年代に入って、統計上は流入の速度

が鈍化する傾向が見られるが、統計には現われない「盲流」と呼ばれる違法な流入者の数が、都市部を中心に増加する現象が見られる。

(3) 西双版纳を構成する3つの県の中でも景洪県の漢族人口が際立って多いが、これは漢族の都市への流入と、景洪県のゴム栽培に適した温暖な気候から、国营農場が数多く建設されたことを裏づけていると考えられる。

1950年代の国营農場建設期の漢族移住と少数民族への影響については次のように整理される。

(1) 国营農場の建設と漢族の流入は1953年前後からはじまり、湖南省を中心に中国各地の農民が西双版纳に移住した。彼らはほとんど体一つでこの地に移住し、甚だしい食糧不足に苦しめられたが、平地に住むタイ族と山地に住む山岳少数民族の居住地域のはざまに農場を拡大していったために、先住少数民族との間で大きな軋轢を生むことなく入植を完了することができた。

(2) 1950年代の後半からはじめられたゴム生産は、70年代半ばになって著しい生産量の伸びを記録しているが、それによって国营農場の生活も豊かになった。また、ゴムの栽培面積も年々拡大し、国营農場周辺の少数民族でも国营農場に参加する者が徐々に増える傾向がみられる。

(3) ゴム生産が著しい伸びを示す一方で、国营農場の人口は、文化大革命終了後に下放青年が帰郷してからは減少傾向にある。また、厳格な一人っ子政策と農村人口の高齢化によって労働人口が減少する一方で、退職者などの非労働人口は増加し続けている。

(4) 漢族が少数民族居住地域に自らの居住地域を拡大していく基礎をつくったという点で、国营農場建設の果たした役割は非常に大きい。

また、少数民族社会に対しては、ゴムをはじめとする商品作物を普及させた意味も大きい。

文化大革命期に「下放」された人々については十分な資料が得られなかったが、一般的に伝えられているように、文革後にそのほとんど全てが帰郷したということではなく、教師や医師としてこの地に残った人々も少なからずおり、目に見えにくい部分での影響の大きいことが推測された。

さらに改革開放政策下での漢族移住については、以下のように要約される。

(1) 景洪における漢族の流入人口のほとんどは、農村の余剰労働人口となった「盲流」とよばれる違法な移住者たちであり、彼らが合法的、経済的に住宅を得られないことと、タイ族が自分の住宅や土地を自由に使う権利意識の強いことが重なって、集落への漢族の流入は1991年からわずか2年ほどの間に急激に進んだ。

(2) 1991年頃から激しくなった漢族のタイ族集落への流入において、漢族はタイ族の伝統的住居形態である高床式住居の床下の空間を借りて住まうことが定着した。1994年の調査時には景洪市街地に隣接する集落（曼景蘭）のほとんどのタイ族世帯が床下や土地を貸しており、中国の物価水準に比して著しく高額な賃貸料収入を得ている。

(3) 床下部屋の賃貸によって高額な賃貸料収入を得たタイ族は、それまでの農業を中心とする労働を放棄しはじめている。これは農業を基盤としてきたタイ族社会の経済的基盤を根底から変化させるものであろう。また、タイ族の若者達は急激に流入する漢族によって就職の機会が著しく減少し、彼らの親達の高額な賃貸料収

研究ノート

入が背景にあることもあって遊休労働力化する傾向が強く、潜在的な社会問題となっている。

(4) 雲南省外から流入している漢族は、地縁関係をもとにした組織「幫」をたよりに移住していることが明らかになったが、この組織は居住地や職業などの点でも強い結び付きを有している。一方雲南省内からの流入者では、漢族以外の白族の流入者も少なからず含まれていることと、彼らは「幫」を介した組織的な移住ではなく、家族単位の移住を行なっている点で雲南省外からの移住者とは異なっていることが、明らかになった。

(東京大学大学院工学系研究科博士課程
〔都市工学専攻〕)

〔付記〕 本研究の調査にあたっては、元雲南民族学院の講師で現景洪県の県知事秘書をされている岩宰氏他、西双版纳タイ族自治州人民政府経済計画局の刀世明氏、同建設局の鄧成穎氏、同民族委員会の譚玉婷氏、中国銀行の岩罕燕氏、中国国際旅行社の岩光罕氏、雲南民族学院研究生の村橋俊之氏の協力を得た。また、1993年10月以降の調査においてはトヨタ財団より研究助成を受けた。記して感謝の意を表する。